

## 令和6年度学校経営計画

令和6年度～令和8年度(1年目)

校番	202 127	学校名	広島叡智学園中学校・高等学校	校長氏名	福嶋 一彦	全日制課程	本校
----	------------	-----	----------------	------	-------	-------	----

### 1 教育目標

「学びの変革」の目指すべきモデルとなる学校として、学びを通じて平和な社会づくりを実現し続ける存在となることのできる人材を育成する。

### 2 育てたい生徒像

社会の持続的な平和と発展に向け、世界中のどこにおいても地域や世界の「よりよい未来」を創造できるリーダーとなる生徒を育成するというビジョンの下、次の①～⑤の5つの資質・能力の育成を目指す。

- ① 様々な場面で活用できる知識・技能の深い理解
- ② 新しい価値を生み出す創造的・批判的思考力
- ③ 異なる文化・価値観を持つ人々と協働する力
- ④ 目標に向かってやり抜く力・自信
- ⑤ 日本語でも英語でも議論・協働できる高い語学力

### 3 中期(3年間)経営目標 ※教育活動その他の学校運営に関する目標

(1) 国際バカロレア教育 (IB プログラム) を教育活動の主たるツールとし、探究ベースの深い学びを展開することにより、本校の教育目標の達成を目指す。  
 (2) 学校生活・寮生活でのあらゆる場面において、多種多様な人とのコミュニケーション活動等を通し、将来のリーダーとしての人格の陶冶に努める。

### 4 短期(本年度)経営目標及び行動計画等 ※中期(3年間)経営目標を達成するための本年度の経営目標及び行動計画等

中期(3年間)経営目標					
(1) 国際バカロレア教育 (IB プログラム) を教育活動の主たるツールとし、探究ベースの深い学びを展開することにより、本校の教育目標の達成を目指す。					
短期(本年度)経営目標	本年度行動計画	評価指標	現状値(前年度)	目標値	
学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連づけながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげ、主体的に学び続ける生徒を育成する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 生徒が国際バカロレア学習の方法 (ATL) を用いて、自身の学びを方向付けたり調整したりして学習活動に取り組むことができるよう、教師は国際バカロレア指導のアプローチ (ATT) を用いて、学習者中心の学びを展開する。</li> <li>○ 自己のアイデンティティの形成や自己や他者のウェルビーイングに向けて、社会奉仕活動 (SA や CAS) を充実させる。</li> <li>○ 外部リソース (人材や教材) を活用し、生徒の多角的な視点や主体性の涵養を図るプログラムを提供する。</li> </ul>	生徒・教職員対象アンケート	新規	3.0 以上 (4段階スケール)	
生徒全員が国際バカロレアルディプロマの取得を目指し、6年間の系統的な学びを実現し、MYP と DP の一層の接続を図る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 教師は、相互授業参観や校内研修・教科会等において、指導方法や評価についての研究・研修を行い、組織的・計画的に教科指導力を向上させる。</li> <li>○ IB 校としてのこれまでの成果と課題を整理し、到達目標に即した指導と評価の改善・充実を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ MYP パーソナル・プロジェクト平均値</li> <li>・ DP スコア平均</li> </ul>	新規	4.7 以上 34 以上	
本校の特色あるカリキュラムで6年間学び、日本語でも英語でも議論・協働できる高い語学力を育成する。また、高等学校から入学する留学生等の日本語習得を目指した指導体制を確立する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 6年間の進路指導と CEFR を指標とした各学年で達成すべき英語能力基準を設け、英語科を中心に生徒の英語能力の向上を目指す。</li> <li>○ 生徒の学年や英語力に応じた、学校外の語学研修プログラムを提供する。</li> <li>○ 生徒の日本語能力の違いに応じて、漢字検定の受検や日本語能力試験の受検に向け、学校全体でサポートする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ CEFR B2 到達生徒の割合 (高1の12月時点)</li> <li>・ 日本語能力試験3級取得 (高2の12月時点)</li> </ul>	新規	25%以上 全員	
生徒がこれまでの学びや活動、その成果やそこに至るまでのプロセス、今後の展望を語ることができ、希望する進路を実現できる支援体制を整備する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ プログラムやコンテストの情報を定期的に発信し、生徒が果敢に挑戦することができる風土を醸成する。</li> <li>○ 生徒が思い描く将来の目標を実現できるよう、個に応じたきめ細やかな進路面談を行う。</li> <li>○ 国内外の大学の情報を発信するとともに、生徒の進路希望に応じた大学訪問プログラムを開発する。</li> </ul>	世界ランキング100位以内の大学への合格者数	新規	25名以上	

中期（3年間）経営目標				
(2) 学校生活・寮生活でのあらゆる場面において、多種多様な人とのコミュニケーション活動等を通し、将来のリーダーとしての人格の陶冶に努める。				
短期（本年度）経営目標	本年度行動計画	評価指標	現状値 (前年度)	目標値
学校生活・寮生活を通し、心と身体の健康のために自己管理・自律的行動ができる生徒を育成する。	○ 6年間のライフイベントに基づき、基本的な生活習慣の確立に取り組みさせる。	寮を含む生活アンケートの肯定的回答割合	新規	70%
自治的活動を通し、生徒が自らリーダーシップやフォロワーシップを発揮し、所属感・連帯感を深めることのできる集団を育成する。	○ 生徒会活動や寮の活動において、生徒それぞれが責任を持ち、見通しを持って、与えられた役割を果たせるよう、指導・支援を行う。	学校行事等の後に実施する生徒対象アンケートの肯定的回答割合	新規	70%
本校の生徒・教職員が「IBの学習者像」を指針とした行動を取ることが出来る。	○ 行動指針・指導指針として「IBの学習者像」を活用し、生徒・教職員ともに意識醸成を図る。	生徒・教職員対象アンケートの肯定的回答割合	新規	70%
日常の食事に対して興味関心を高めることで、生徒自身が自己の健康を意識するとともに、望ましい食生活の習慣の形成を獲得し、実践しようとする力を育む。	○ 給食指導、食育指導を通して、健やかな心と体を育むための食に対する知識の習得と意識の向上を図る。 ○ 生徒の主体的な活動をもとに、食に関する啓発活動を実施する。	生徒対象アンケートの肯定的回答割合	新規	70%

#### 働き方改革に関する短期（本年度）目標

短期（本年度）目標	本年度行動計画	評価指標	現状値 (前年度)	目標値
教員が、子供と向き合う時間が確保されていると感じることができている。	子供と向き合う時間を確保するための方策について、各分掌や学年の会議で検討し、職員会議で定期的に共有する。	業務改善アンケート項目における肯定的回答の割合	83%	95%
教職員全員が勤務時間に対して高い意識を持ち、時間外における勤務を縮減している。	働き方改革を意識した業務遂行ができるよう、業務分担・進捗状況について、定期的に点検・見直しをする。	一月当たりの時間外勤務時間が45時間以下の教職員の割合	93%	100%

#### 別紙：現状分析

①	国際バカロレア教育（IBプログラム）を教育活動の主たるツールとし、探究ベースの深い学びを展開することにより、本校の教育目標の達成を目指す。 ○ 令和2年度10月のMYP認定から、MYPを主たるツールとした探究的な学びを展開し、発展させることができている。1期生が令和4年度に実施したMYPの集大成となるパーソナル・プロジェクトでは、校内平均が4.38（7点満点、世界平均4.06）であり、さらに2期生の校内平均は4.56（世界平均値：4.04）といずれも世界平均を4～7%上回っており、本校のMYPの実施が、IBの水準を一定程度上回っていることを示している。 ○ 令和5年1月から開始したDPでは、カリキュラムの運用とともに、内部評価の実施及び外部評価の準備に取り組んでいる。多様で厳しいDPの評価に向けて取り組む中で、DPの最終段階で力を発揮するために必要な資質・能力を実感しており、6年間のカリキュラムを再度見直しながら、その効果的な運用に取り組んでいる。 ○ 生徒個々の興味関心やニーズに対応した探究的な深い学びを実施していく上では、教育課程内外の教育活動のブラッシュアップや、それに伴う外部連携は必要不可欠である。今後、外部リソース（人材や教材）を積極的に活用しながら教育活動を展開できる教員の資質・能力の向上に取り組んでいく必要がある。
②	学校生活・寮生活でのあらゆる場面において、多種多様な人とのコミュニケーション活動等を通し、将来のリーダーとしての人格の陶冶に努める。 ○ 異校種・異学年・異国籍の生徒が協働して学び、共に生活する中で、リーダー・フォロワー双方の立場を経験することを通して、他者の立場に立った言行を取ることが出来る生徒が増えつつある。一方で、基礎的・基本的な生活習慣が十分に確立していない生徒が一定数いる。 ○ 生涯学習者として実現を目指す「IBの学習者像」を実践できる生徒が増えつつある。一方で、学校生活・寮生活のあらゆる場面で十分に意識し、実践できているとは言い難い生徒も一定数いる。
働き方改革 各教職員が限られた時間の中で業務の効率化とタイムマネジメントに努め、「学校における働き方改革取組方針」の徹底を図る。	
○ 日頃からの声掛けや業務負担だけでなく、年次有給休暇の計画的な取得、ICTの活用、見通しを持った業務遂行、帰宅時間の目標設定等、働き方改革に対する意識が具体的な行動により一層表れるようになってきている。 ○ 完成年度に向けて、新規事業が増えていく中、特定の教員に業務が偏ることがないように主任等が継続的に実態把握し、業務の平準化に努める。	